会員通信　News & Comments

魚類学雑誌 58(1): 114–116
2011年4月25日発行

国際会議参加報告：International loach conference 2010（国際ドジョウ会議2010）
31, August, 1–3 September 2010, Prague, Czech Republic

コイ目ドジョウ類はユーラシア大陸の淡水域に広く分布する底棲魚類である．一般的にドジョウといえば筒状の体型や口ヒゲなどが想像されるが，側扁したアユモドキ類や扁平なタニノボリ類など，その体型や生態は様々である．また，特にドジョウ科のシマドジョウ属魚類では地理的に染色体数や形態を複雑に変化させ，異種間交雑由来の集団も知られており，その種分化に関する研究が活発に進行中である．分類学的にも問題点は多く，近年においても未記載種が次々に発見されている．このような魅力的なドジョウ類を日々研究している世界各国の研究者たちが一同に会する国際会議が，2010年8月31日から9月3日までの4日間，チェコ共和国のプラハで開催された．前回までは「国際シマドジョウ会議」と銘打っていたこの国際会議は今回昇格し，「国際ドジョウ会議」に改称された．なお，前回までの「国際シマドジョウ会議」はほぼ4年に1度で，1999年にはチェコのブルノ，2002年にはポーランドのオルシュチン，2006年にはクロアチアのシベニクが開催地であった．

今回の開催地であるチェコ共和国は，ドイツ，オーストリア，ポーランド，スロバキア共和国などと国境を接し，ヨーロッパの中央に位置する．第2次世界大戦後の1968年，プラハの春と呼ばれる自由化運動が行われたことで有名なプラハは，チェコの中西部にある．チェコ共和国の首都であり，同国の経済・政治・文化の中心地である．プラハ市内には，川幅が100–300 mもある壮大なヴルタヴァ川（日本ではモルダウ川として知られている）が横切り，その東にはユネスコ文化遺産に登録された歴史的な建築物が多数見られる（プラハ歴史地区）．そんな著名なプラハであるが，大変残念なことに日本からの直行便がなく，筆者の場合は福岡空港から韓国の仁川空港に行き，そこで乗り継いでチェコ共和国に向かった．日本との時差は7時間あったため，しばらくは午後5時になると眠気に見舞われ，それに打ち勝つのが大変であった．チェコの気候は大陸性でやや乾燥し，気温が最高15°C，最低8°Cと日本に比べてやや肌寒く，冬服を着ている人も見られた．たまに予想できない雨も降ったが，概ね晴れており，日本より緯度が高いせいか日差しが強烈で，空を眺めることができないくらいであった．プラハ中心の町並みは各国から来た観光客で，常にお祭りが開かれているかのように賑わっていた．プラハの食品は日本より安く，昼食・夕食を問わず，多くの人たちがピルスナーというチェコを代表するビールを飲み，パンや肉，キャベツの漬け物などを食べている．またナマズやコイ，マスなど淡水魚の料理も一般的である．通常のスープであっても，どんぶり大の器に盛られて出てくるほど，全般的に量が多かった．

会議の会場のホテルは街の中心部からバスで20分程のところにあり，周辺は学校や一般2階建て家屋が並ぶ静かな住宅街であった．プラハでの交通システムは，時間制限のある地下鉄，バス，トラムの統合チケットであり，これを購入していていれば自由に乗り降りできる．これらの乗り物にはたまに検査員がチケットをチェックするシステムである．会議の参加者は総勢57名で，開催地であることも手伝ってか，チェコの研究者たちが12名と一番多く，その次は日本の研究者であった．斉藤憲治（中央水産研究所），青山　茂（神戸市），北川忠生（近畿大学），中島　淳（福岡県保健環境研究所），相木寛史（石川県水産総合センター），榎本亜矢（日本大学），佐藤辰郎（九州大学）の各氏と筆者の8名が参加し，これは総勢の約15%である．日本からこれだけ多くの研究者が参加したのだから，近い将来，国際ドジョウ会議が日本で開催できるのではないか，と正直感じた．

会議では口頭発表30件，ポスター発表30件が4日間で行われ，分布と多様性，分類・系統，進化生態学，生態・生活史など，多岐にわたる内容であった．今年度の会議の総責任者であったチェコ科学アカデミーのJorg Bohlen博士によれば，「第3回までは遺伝に関する発表が多かったが，今回は生態・生活史に関する研究が増加し，発表内容が多様化した」とのことであった．8月30日夕方には，歓迎パーティーが開かれた．筆者は今回がこの会議への初参加であったので，自己紹介などをして

図1. 会議初日，ポスター発表を傾聴する参加者たち．

回った．私はシマドジョウ関係の論文を日ごろからチェックしているため，大部分の研究者の名前はよく知っていたものの，参加者の多くは過去にこの会議に参加した経験がある方ばかりで，まるで家族のようにフレンドリーな関係にみえた．次に参加するときには，私も家族のようにパーティーを楽しみたいものである．もう一つ嬉しくて驚いた点は，私のような女性ドジョウ研究者との出会いだった．互いに母国語も異なり，英語で上手に話し合うことは難しかったが，同じ女性研究者としてもつ悩み，研究結果に対する喜び，研究の達成感など，共感できる部分に関しては，言葉を越えて自然に意志が伝わった．

8月31日，いよいよ会議の初日が始まった．オープニングでは親切にも会場までの交通利用方法，周辺のレストラン，プラハの中心地が一望できる観光スポットなど，プラハで必要なすべての情報を説明してくれた．会議のプログラムは毎日Key noteと題して1名が40分間の講演を行うことからスタートした．初日は斉藤憲治博士がシマドジョウ属魚類の生物地理学とドジョウ類がコイ目の中で占める系統的位置に関する内容を，2日目はMaurice Kottelat博士がフクドジョウ科（Nemacheilidae）を中心とした多様性に関する内容を，最終日にはTan Heok-Hui博士がタニノボリ科（Balitoridae）の多様性と種分化に関する内容を講演した．会議は毎日9時30分に始まり，午前中にKey noteの講演を含む5名の発表があり，午後には3名の口頭発表とポスター発表が行われた．私は九州のヤマトシマドジョウの産卵期・非産卵期の環境選択に関する研究，韓国の*Kichulchoia brevifasciata*の成長にともなう食性の変化の2題について発表したが，普通の学会のように関心をもつ研究者がポスターの前に個人的に集まり，発表を聞いたり，質問をしたりするのではなく，チェアーパーソンが1人ずつ発表者を指名し，回っていく方式であり，まるで口頭発表のようであった．私の予想とは違う発表方式であったため，一瞬緊張したが，チェアーパーソンであるBohlen氏が私の発表後，内容を要約・整理してくれて無事に終えることができた．

会議の2日目には午後のポスター発表は行わず，エクスカーションとしてプラハ市街を見学した．市街地で降車し，600年間ヴルタヴァ川両岸をつなぐプラハで最も古いカレル橋を渡り，様々な時代に建てられた情緒あふれる美しい建築物の間を抜けて，夕方パーティーが開かれるレストランまで歩くというコースであった．途中，カレル橋を渡る手前に小さな流入河川があったが，それは典型的な人工河川であった．Handbook of European Freshwater Fishes（ヨーロッパの淡水魚類図鑑）の著者でもあるKottelatさんはこの川を見て，「この河川は魚類の生息に良くない代表的なケースです」とおっしゃって

図2. プラハ観光後の夕方，パーティー風景．

図3. 国際ドジョウ会議の参加者集合写真．

いた．ちょっと切ない気分であった．レストランに着いた後は，チェコの伝統的な料理やビールを楽しみつつ，夜11時ごろまでパーティーは続いた．このパーティーでも，英語で自由に意見を交換するのは難しかったが，勇気を出してまだ話をしていなかった研究者たちと，魚の採集方法や，他の国の研究環境と文化などに関する話を交わした．個人的には，プラハの重要な文化財も楽しかったが，過去の会議のように魚を直接採るとか，触れながら観察するといった機会があったら良かったと思っている．

最終日の9月3日は，午前11時半にすべての発表が終わる短い日程であったが，最後まで残ってすべての発表を見る人が多かった．会議の最後に昼食をホテルで一緒にした後，去り際には皆，他の参加者達のテーブルを回りながら，両ほおに口付けをするヨーロッパ式あいさつをし，4年後に再び会うことを約束した．これで4日間の短い会議日程が終わった．多くの分類群を対象とする大規模な学会の場合，参加者数が多い割には，私自身の興味がある研究はあまり多くなく，自分の研究と関連する研究者を見つけて議論するのは結構大変である．しかし，この会議の場合，規模は小さくても，ドジョウ類を研究する全世界の研究者たちが1ヶ所に同時に集まるため，大部分の内容は私自身の興味があるもので，その内容を一緒に共感することができる．さらに，多くの時間を利用して容易に声をかけて討論・意見交換することができる．それがこのような学会の最大の魅力であると思う．期間中，厳しい質疑応答の場面もあったが，それはドジョウ類に対する情熱からであると確信する．そして，それらの情熱を持って研究する人々に出会い，改めてドジョウ類を研究している私自身を振り返ることができた．「私は本当に研究が好きなのだろうか？単に学位欲しさに研究をやっているのでは？」と自問自答することもあるが，やはり私はシマドジョウ類の未だ明かされていない生態を解明したいと思っているのだろうと，今回心から確信することができた．これからは，この国際会議で知り合った多くのドジョウ類を愛する研究者が，私の研究を心から応援してくれていることを支えに，日々の研究に取り組みたいと思う．最後に写真を提供してくださったMiloslav Petrtyl氏，日本語原稿を校正してくださった，鬼倉徳雄先生（九州大学）と中島　淳博士（福岡県保健環境研究所）に感謝いたします．

（金　銀眞　Kim Eun-Jin：〒811-3304　福岡県福津市津屋崎4-46-24　九州大学大学院生物資源環境科学府附属水産実験所　e-mail: jaurlim01@live.co.kr）

魚類学雑誌 58(1): 116
2011年4月25日発行

追　悼

疋田　豊彦氏のご逝去を悼む

日本魚類学会の評議員を長年奉職された疋田豊彦氏が，2010年4月5日にご逝去されました．疋田氏は，著名な魚類学者疋田豊治氏のご子息として1924年12月10日に誕生されました．1943年3月に札幌第一中学校，1947年3月に札幌臨時教員養成所，1950年3月に北海道大学理学部動物学科をご卒業され，1950年4月に北海道水産孵化場調査課に入庁されました．1951年の水産資源保護法の制定にともない，1952年に北海道水産孵化場は国立北海道さけ・ますふ化場と道立水産孵化場に分かれました．疋田氏は国立北海道さけ・ますふ化場調査課に籍をおかれ，1985年3月に退職されるまで一貫して魚類の系統分類学および生活史の研究に従事されました．疋田氏は，『サケ属魚類の生態学・形態学的研究』（英文）により1961年9月に理学博士（北海道大学）の学位を取得されておられます．本研究では，サケ属魚類を骨学的研究結果から軟骨魚類と他の硬骨魚類の中間的存在と位置づけ，比較形態学的研究結果から形態形質が未分化であることを明らかにしたうえで，その系統樹の作成を試みられております．本研究は学術的評価がきわめて高く，phenotypeとしての形態学的視点からみたサケ属魚類の系統発生に関する知見はいまだに色あせず，広く引用されております．また，疋田氏は北海道さけ・ますふ化場研究報告書の編集と出版に長年携わられ，本誌をわが国唯一のサケ科魚類増殖研究専門誌として国内外に知らしめました．このように，わが国におけるサケ科魚類の生物学を世界レベルに引き上げた疋田氏の功績は高く称讃に値するものであります．ここに謹んで深く哀悼の意を表し，心よりご冥福を祈ります．

（帰山雅秀　Masahide Kaeriyama：〒041-8611　函館市港町3-1-1　北海道大学大学院水産科学研究院　e-mail: salmon@fish.hokudai.ac.jp）

魚類学雑誌 58(1): 116-118
2011年4月25日発行

福所　邦彦さんのご逝去を悼んで

昨年10月のはじめでしょうか，9月23日に福所邦彦さんが亡くなられたとのお手紙を奥様からいただきました．福所さんは，1942年韓国釜山で獣医学研究者の三男としてお生まれになりましたので，まだ68歳でした．

昨年3月の写真です．左から福所さん，私，私の妻です．私が養殖研究所で仕事をしている間に，福所さんご夫妻は妻を伊勢神宮に連れていってくださり，ご自分で車を運転されてお昼過ぎに妻を伊勢自動車道伊勢西インターチェンジまで送ってきていただきました．撮影していただいたのは，福所さんの奥様（淳子さん）です．

お便りの少し前に，ガン細胞が関節に転移して歩行が困難になっておられるということを伝え聞いておりましたが，そんなに早くこのような事態が訪れたことに言葉を失いました．実は，昨年3月に私たち夫婦は伊勢を訪れ，福所さんご夫妻にお目にかかっていたからです．その時には，私たち夫婦を自分の車で運転して，斎宮歴史博物館に連れて行ってくださった後，ご自宅で夕食をご一緒させていただきました．食欲も旺盛で，前年暮れにはかなり厳しい病状になっておられたということなど信じられないぐらいのお元気さでした．

この追悼文を書くように依頼を受け，改めて私にとっての福所さんの存在を振り返ることができました．福所さんは，多くの学術論文とは別に，エッセイを4冊出版されています．大変几帳面な方で，毎日日記を書かれていたことを思い出しますが，その内容をもとに書かれた人としての温かさとユーモア溢れた文章から，私の知らなかった多くのことを含めて，福所さんの歩んでこられた道を知ることができます．

福所さんとは，私が大学を卒業した昭和48年に長崎県に就職したときに知り合いになり，何かと気遣っていただきました．もう，およそ40年にも近い長いおつきあいでした．

私が学部卒で，長崎県職員となったとき，まず最初に新任者研修がありました．日曜日には何もすることがなく，野母崎に福所さんを訪ねました．当時の京大の水産学科の助手をしておられた中村　泉先生に，長崎県の水産試験場には大変良い先輩がおられるからと紹介していただいていたのです．福所さんは，東京水産大学修士課程を終えられたあと，京都大学水産学科の松原喜代松先生を頼って，京都大学農学部研修員として2年間をすごされたために，中村　泉先生とも親しくなられたそうです．

長崎市の中心地からバスで約1時間，その少しあとに流行った「岬めぐり」という歌そのままの風景を見ながらバスに揺られて野母崎にたどり着きました．野母崎は，イワシ旋網の基地として，それを加工する煮干工場が何軒もあるひなびた漁村でした．そこに建てられた長崎県水産試験場増養殖研究所は，当時の海産魚類種苗生産や増養殖研究のパイオニア的存在で，福所さんはそこに勤務されていたのです．後に東京水産大学教授になられた藤田矢郎先生が所長，九州大学教授になられた北島力先生が魚類科長でした．地方の水産試験場出先機関としてはずいぶんと豪華な顔ぶれでした．日曜日の人気のない研究所の飼育水槽を見学させていただいた時に，私は初めてヒラメの変態異常に伴う体色異常個体の人工種苗に出会いました．私は，就職したときから水産試験場勤務を強く望みましたが，そんなことは聞き入れてもらえるはずもなく，最初の1年間は県庁勤め，さらに3年間は長崎県の離島の一つ壱岐に勤務しました．その頃の，水産庁西海区水産研究所には，畔田正格さんがおられ，後に京都大学にうつられた田中　克先生が赴任してこられました．西海区水産研究所では有名な志々伎湾のマダイの初期生活史研究が精力的に進められていました．その間にも，福所さんや畔田さんたちとは何度もお目にかかり，大阪から出て来た頼りない若者の心が挫けないように支えて頂いたことを思い出します．

長崎県職員として5年目を迎え，ようやく念願の野母崎にある増養殖研究所に勤務することができるようになりました．福所さんとは研究所の近くの研究所宿舎のお隣同士でした．別名「まむしが丘団地」と言いましたから，どんな環境かご想像がつくことでしょう．そのころには，福所さんは日常の激務に加えて学位論文の執筆に毎日夜遅くまで頑張っておられました．七夕の笹飾りに書かれた「お父さんの学位論文が早く完成しますように！」という就学前の息子さんのことばに，ご家族の理解の深さがしのばれました．

しばらくして，水産庁の養殖研究所が三重に設置されることになり，1979年4月に福所さんは水産庁（養殖研究所玉城庁舎）へ転身されました．その後，養殖研究所南勢庁舎を立ち上げることに力を尽くされ，遺伝育種室長としての勤務を皮切りに，1991年4月から日光支所長，1993年10月から農林水産省国際農林水産業研究センター水産部長，1997年4月から水産庁養殖研究所企画連絡室長，2000年10月から同瀬戸内海区水産研究所長，2001年4月からは独立行政法人水産総合研究センター瀬戸内海区水産研究所長を勤められ，2002年9月に同退職し，（財）名古屋港水族館飼育展示部長を2006年3月まで勤められました．

福所さんが歩んでこられた道筋は，我が国の海産魚類の種苗生産や増養殖の歴史そのものと言っても良いといえます．どのような立場にあっても常に全力を尽くされ，決して人を恨みに思われない純粋で前向きの姿勢は，私には常に自分の姿を振り返らせる存在でした．しかも，自分の行った研究は埋もれさせてしまわずに論文として

残してこられました．同時に，福所さんのエッセイを拝見しても理解できるように，どんなところで仕事をするにしても，まずその土地の歴史や風土を理解し，その場所を楽しもうとされていました．そのお付き合いの範囲はとても広くて豊かなもので，福所さんの暖かな人柄にひかれて多くの人が交流させていただいたものと思います．昨年3月にも，福所さんの書斎で，几帳面に整理されたアルバムに，本当に楽しそうな人々と共に写った写真を見せていただきました．

思い起こしてみますと，私が多少の論文をかけるようになったのも，JICAなどで海外に派遣されたのも，初めて国際学会に参加したのも，すべて福所さんが導いてくださいました．

こんな風に，多くの人に大きな影響を与え，私には研究や仕事，人生の意味を教えていただいた福所さんがこんなに早く逝ってしまわれたのは，本当に残念なことです．

私の思い出ばなしに終始してしまい恐縮ですが，心よりご冥福をお祈りします．

（青海忠久　Tadahisa Seikai：福井県立大学　海洋生物資源学部　〒917-0003　福井県小浜市学園町1-1　e-mail: seikai@fpu.ac.jp）

魚類学雑誌 58(1): 118-119
2011年4月25日発行

高木　和徳先生の思い出

高木和徳先生が2010年12月18日に逝去された．享年85歳であった．眠るように安らかな最後だったと奥様からお聞きした．葬儀は12月20日に親族のみで行われた．高木先生は第二東京市立中学校（現在の東京都立上野高校），農林省水産講習所（1949年に東京水産大学となり，2003年に商船大学との統合を経て東京海洋大学）を卒業されているので，私にとって高校・大学の大先輩である．先生の思い出を記してみたい．

高木先生はハゼ類の頭部感覚系を詳細に観察し，ハゼ類の系統分類学を飛躍的に発展させた．また，ハゼ類の分布や生態についても優れた業績を残された．現在でもハゼ類の系統や分類に関する多くの論文に高木先生の業績が引用されている．今では優れた機能の顕微鏡が多くの研究機関に配備されているが，高木先生が頭部感覚系を研究されていた1940年代後半から1950年代の顕微鏡の能力は極めて限られたものであった．ハゼ類の頭部感覚系を観察することは現在でも簡単なことではない．注意力と忍耐力，そして多くの時間を必要とする作業である．約60年前にハゼ類の微細な感覚系を観察することは極めて困難なことだったろうと思う．先生にお聞きしたことがあるが，論文に使用したデータは部分的なもので，まだ多くの未発表の観察結果があったそうである．先生の発表論文は非常に多くの観察データ，つまり膨大な時間を費やした丁寧な研究に裏打ちされているのである．また，先生はハゼ類について，陛下（当時は皇太子殿下）に3ヶ月に渡って集中講義的なご進講をされたことがあった．赤坂御所の防空壕跡にあった研究室でご進講は行われたそうであるが，時には陛下の論文の添削を午後3時から夜遅くまで続け，終電車に乗って帰宅されたこともあった．先生は研究のこととなると妥協しない方であったが，その姿勢は相手が陛下といえども変わらなかったのである．

高木和徳先生（1925–2010）

高木先生は論文の書き方や発表方法，そして学会誌や研究機関内の学術誌（紀要や彙報など）の編集について確固とした考え方をもっておられた．先生はマサチューセッツ工科大学（MIT）の「卒業論文の書き方」を翻訳され，東京水産大学の学部4年生達に配布して下さった．しかし，多くの学生達にとっては「猫に小判」であった．私もその一人であった．その価値がわかるようになったのは，北海道大学大学院の修士2年になってからである．大学院生になってから読み返してみると，MITの「卒業論文の書き方」は単に技術的な事柄を扱っているわけではなかった．どのようにテーマを設定すべきか，ゴールに向かってどのように時間配分を考えるか等，研究を始める前に検討しなければいけない事項が並んでいた．もちろん，論文の「書き方」そのものも扱われていた．私は大学院生として「どうして日本の大

学ではこのような指導をしないのだろうか」と疑問に思うと同時に，高木先生から頂いた貴重な文献を眠らせていたことを反省したものである．

高木先生は40年前から卒業論文に臨む学生に適切な指導を試みておられたのであるが，当時の東京水産大学が組織として，論文の書き方を系統立って教えていたわけではない．残念ながら最近も同じような状態が続いているようである．魚類学会や他の学会等で学部学生や大学院生達と話をすると「論文の書き方」について教育を受けていない場合が多い．高木先生が試みられた優れた指導方法が多くの大学で採用され，状況が好転することを祈りたい．

高木先生は英語と仏語が堪能であった．先生は1951年に新属新種として*Crassinarke dormitor*ネムリシビレエイを記載されたが，その論文は仏語で発表されている．先生は仏語に堪能なこともあり，科学論文の編集に関するヨーロッパの学会に足繁く参加されていた．東京水産大学を定年退官されてからもこのような学会への参加は続いていた．先生は時折，学会の近況報告を送って下さり，入会してみてはどうかとお誘いを受けたこともあった．先生がMITの「卒業論文」を翻訳したのは50年以上前の話であるが，その後も一貫して科学論文の書き方や編集に強い興味を持ち続け，「オウディクス トウキョウ」を設立し，その所長として研究論文や研究発表の支援を行っていたのである．

高木先生は魚類学会設立当初から学会の発展のためにつくされ，会計幹事や編集委員として活躍された．また，先生は「魚名大辞典」（日本魚類学会編1981）の準備と編集を担当された．「魚名大辞典」の出版は日本魚類学会の一大事業であったが，実際の編集作業は4人の研究者（辞書部：安田富士郎，高木和徳；リスト部：富永義昭，上野輝彌）が担当した．魚類の膨大な地方名を収集し，整理することは大変な仕事である．現在ではパソコンがあり，データベースソフトが普及し，インターネットを利用することもできる．しかし，1970年代にはパソコンもデータベースも存在しなかった．当時，魚名の整理にどれくらいの時間と労力が必要だったかを考えると，頭が下がる思いがする．

高木先生は何事もきちんと処理する方であったが，ご自身が収集されたハゼ類のコレクションと文献もその例外ではなかった．ハゼ類コレクションは陛下の研究室に寄贈され，研究論文の別刷や書籍は国立科学博物館に寄贈された．後に続く研究者のため，標本も文献も散逸しないように配慮されたのである．今，手元にある先生ご自身が日頃活用されていた「魚名大辞典」を開くと，多くのページに付箋が貼られ，赤字で訂正指示が入っている．付箋と赤字によって先生が「魚名大辞典」の出版後も愛着と責任感をもっておられたことがわかる．

高木先生はなかなかお洒落な紳士であった．フォーマルな場合には服装に隙がなく，カジュアルな席では雰囲気に合った着こなしをされた．また，旅行がお好きで国内外を問わず，様々な所へ奥様と一緒にお出かけになり，時折お会いすると楽しそうに旅のエピソードを話してくださった．先生のにこやかなお顔と穏やかな話しぶりに接する機会は二度とやって来ない．寂寞の感を禁じ得ない．先生のご冥福を祈る．

（松浦啓一　Keiichi Matsuura：〒169-0073　東京都新宿区百人町3-23-1　国立科学博物館　e-mail: matsuura@kahaku.go.jp）

魚類学雑誌 58(1): 119-125
2011年4月25日発行

Ichthyological Research—現状と論文投稿へのお誘い

Ichthyological Research, an international journal published by the Ichthyological Society of Japan —the present status and invitations for submission

「*Ichthyological Research*」（以下，IR）は日本魚類学会が出版する魚類学の国際学術雑誌であり，当学会の目的である「魚類学の進歩と普及を図る（会則2．目的）」ための事業の一環として刊行されている出版物です（会則3．事業）．前身である和英混合の「魚類学雑誌」から1996年に英文誌として分離して以降，2001年には大手国際学術出版社であるシュプリンガーからの出版となり，さらに2007年には従来会員のみに限られていた論文投稿を非会員にも開き，真の国際誌として新たな歩みを始めています．IRは会員の皆さんの協力のもと，学会幹事会，評議委員会，編集顧問，そして歴代編集委員のたゆみない努力によって発展し，2011年には魚類学雑誌から通算58巻目になります．

本稿では，IRの編集委員会より，これからIRを含め国際的な学術誌に論文を発表していかれる若い方々をはじめ，広く会員の皆さんにIRへの投稿や編集過程について案内・紹介し，さらに本誌が現在抱える大きな課題についてお伝えしたいと思います．本稿の主な狙いは，会員の皆さんに，その価値のある研究成果の発表の場として，今後ますますIRを活用していただき，同時にIRをそれに値する雑誌として一層成長させるためにご協力をお願いすることにあります．

1. ピアレビュー誌というものは…

IRは他のほとんどすべての学術誌と同様にピアレビュー（peer review）誌です．ピアレビュー制とは，同業の専門家による審査・判定システムであり，学問のレベルと信頼性の維持を図るために考案・採用されてきた論文審査システムです．また基礎科学分野の多くの学術誌と同様に，IRの審査プロセスはボランティアにより行

われています．審査プロセスに関わるのは，次節で説明するとおり，編集委員会と匿名の査読者（レビューワー，レフェリー）です．編集委員会は委員長（現在：佐々木邦夫）と主任編集委員（同：渡辺勝敏），そして一般の編集委員からなり，2011年1月時点で計20名が任に当たっています．査読者は編集委員によってその専門性に基づき学会内外から選ばれた同業者で，各投稿論文につき2，3名が選定されます．査読者として依頼された者は拒否することもできます．大学教員など，学会誌の審査・編集が職務の一環とみなされうる職業もありますが，必ずしもそうでない方も職務外の時間を使ってピアレビュープロセスに貢献しています．若い投稿者のなかには，査読者や編集委員を自分よりレベルが高い指導者のようにみなし，そのような姿勢で接する方もいますが，そうではなくて，（繰り返しますが）それらはいずれもボランティアの同業者です．

編集委員は査読者による審査意見をもとに投稿原稿の採否や改善内容を判断します（後述）．査読者が注意深く論文内容を査読する時間，そして編集委員が複数の査読者の意見を踏まえ総合的に論文を審査する時間は決してわずかなものではありません．他の仕事（本務）や，なけなしの自身の研究・論文執筆の時間，あるいは余暇・休息の時間を大幅に割き，ふつう自らの業績に加えられることのない作業に携わっています（さらに多くの研究者にとって，関わる学会は魚類学会のみではありません）．

なぜそのようなピアレビューシステムが成り立ちうるのでしょうか．

答えは2つに要約されると思われます．まず，自分自身（共著を含む）の投稿論文についても，少なくとも3名（編集委員と最低2名の査読者）が同様に時間を使っているとの認識です．そして，ピアレビュー制が（欠点があるにしても）論文の妥当性や信頼性，あるいは学問の権威を保証する有効な方式であることを踏まえ，それに貢献することに多くの研究者が誇りと責任を感じているからです．つまり，ピアレビュー制は，ただ乗りを自ら許さない，公正な相互扶助（互恵）行為に寄って立つ，研究者自らによる主体的な学術活動であるといえます．

2. IRにおける投稿と査読・判定プロセス

IRは2009年より，シュプリンガー社が提供する電子投稿管理システム（Editorial Manager™；以下，EM）を用いて投稿・編集処理がなされています．現在のIRの編集プロセスは本システムの柔軟性の範囲内で運用され，導入以前から変更になったプロセスもあります．以下に簡単に投稿からの流れを説明します（図1）．

投稿　EMでは，電子メールアドレスが基本的なIDとされ，未登録の場合は最初にウェブサイト（http://www.editorialmanager.com/icre/）からアドレス，氏名ほか必要項目を登録します．その後は，ユーザー名とパスワードを入力し，著者としてログインし（Author login），画面のメニューや指示に従って，投稿や進行状況のチェックを行うことになります．このようなシステムを初めて利用する方はとまどうかもしれませんが，「習うより，慣れろ」と考えてください．無事原稿のアップロードが終了したら，PDFファイルをダウンロードして細部にわたり確認し，承認（Approval）をすることで投稿は完了です．なお，インターネットが利用できない投稿希望者については，事前に編集委員会に連絡いただければ，できる限りの対応を行います．

査読・判定プロセス　投稿された原稿はまず編集委員長（Editor-in-Chief）がチェックをします．あまりに体裁に不備があったり，内容が本誌に適していないような場合には，著者にその旨が連絡されます．編集委員長が査読プロセスに回してよいと判断した原稿には「ICRE-D-##-#####」という番号が与えられ，それらは専門分野に基づき，担当編集委員（Section Editor）に割り当てられます．

担当編集委員は，内容を検討し，専門的な観点から査読に回すべきかどうかを判断します．査読に回しても採択がほぼ不可能と判断された場合，編集委員長に「編集委員却下（リジェクト）」を提案します（却下の決定に関しては後述），それ以外の論文は2，3名の査読者にEMを通じて査読が依頼されます．ここまでのプロセスは1週間以内に終えることを目指しています．

査読者には通常3週間の期限を切って，査読を依頼します．査読者の判定答申は5段階あり，「1．受理Accept」，「2．若干の改訂の後，受理Accept after minor revision」，「3．大幅な改訂の後，受理Accept after major revision」，「4．却下だが，しかるべき改訂の後，再投稿を勧めるReject for now, but encourage resubmission」，「5．却下Reject」となります．編集委員は複数の査読者の判断を踏まえ，判定を決定するか，さらに査読者を追加します．判定までの期間は1ヶ月以内を目標としています．

判定が2か3の場合，判定メッセージに記されている手順に沿って，著者は原稿の改訂を行い，改訂内容を明記したカバーレターとともに再びEMを通じて投稿作業を行います．改訂原稿には「ICRE-D-##-#####R1 (R2, R3…)」と継続した番号が付けられ，編集委員長を介して，基本的に同じ担当編集委員に再割り当てされます．大幅改訂（3）の場合には基本的に再び査読者に回されます．わずかな改訂（2）の場合は，担当編集委員のみで判定することもあります．

判定が4か5の場合，担当編集委員は，最終判定の前に編集委員長と主任編集委員に報告します．査読者の意見を踏まえた上で，3者の合意をもって，「却下」という編集委員会の判断が下され，著者に通知されます．再投稿可（4）の場合，しかるべき改訂がなされ，再びIRに投稿いただくことを希望します．その場合には，新たな論文として投稿することになりますが，再投稿であることを明記し，前回のコメント，却下理由に対して適切

な改訂がなされたことを具体的に記したカバーレターを付ける必要があります．判定が5の場合，残念ながら本誌への掲載を諦めることをお勧めします．再投稿しても，基本的に査読に回されずに却下されます．

受理後のプロセス　判定が1の場合は，めでたく著者に受理の通知がEMを通じて行われ，それ以降の編集プロセスは掲載候補原稿として主任編集委員（Managing Editor）の手に移ります．つまり受理の決定は担当編集委員によってなされます．なお，この段階では掲載は確定していません．その後，掲載までに重大な欠陥（大きな内容的な問題・不備，二重投稿・捏造や盗用の発覚等；後述）が認められた場合，一旦受理された原稿でも掲載しません．

主任編集委員に渡った原稿は，主に体裁面でのチェックが行われ，また読者の視点に立った最終確認が行われます．主任編集委員は，受理判定後できるだけ1週間以内に，電子メールにより，最終原稿・図の電子ファイル・和文要旨（日本人の場合）の提出を著者に依頼します．その際，主任編集委員は，EMに登録されている原稿をもとに，Microsoft Wordの変更履歴機能等を用いて修正した原稿を著者に送っています．著者はそれを入念にチェックし，最終稿を確定します．2011年1月から「超過ページ代支払い誓約書」の提出もお願いしています．これは超過ページ代未払いによる学会財政の圧迫へ

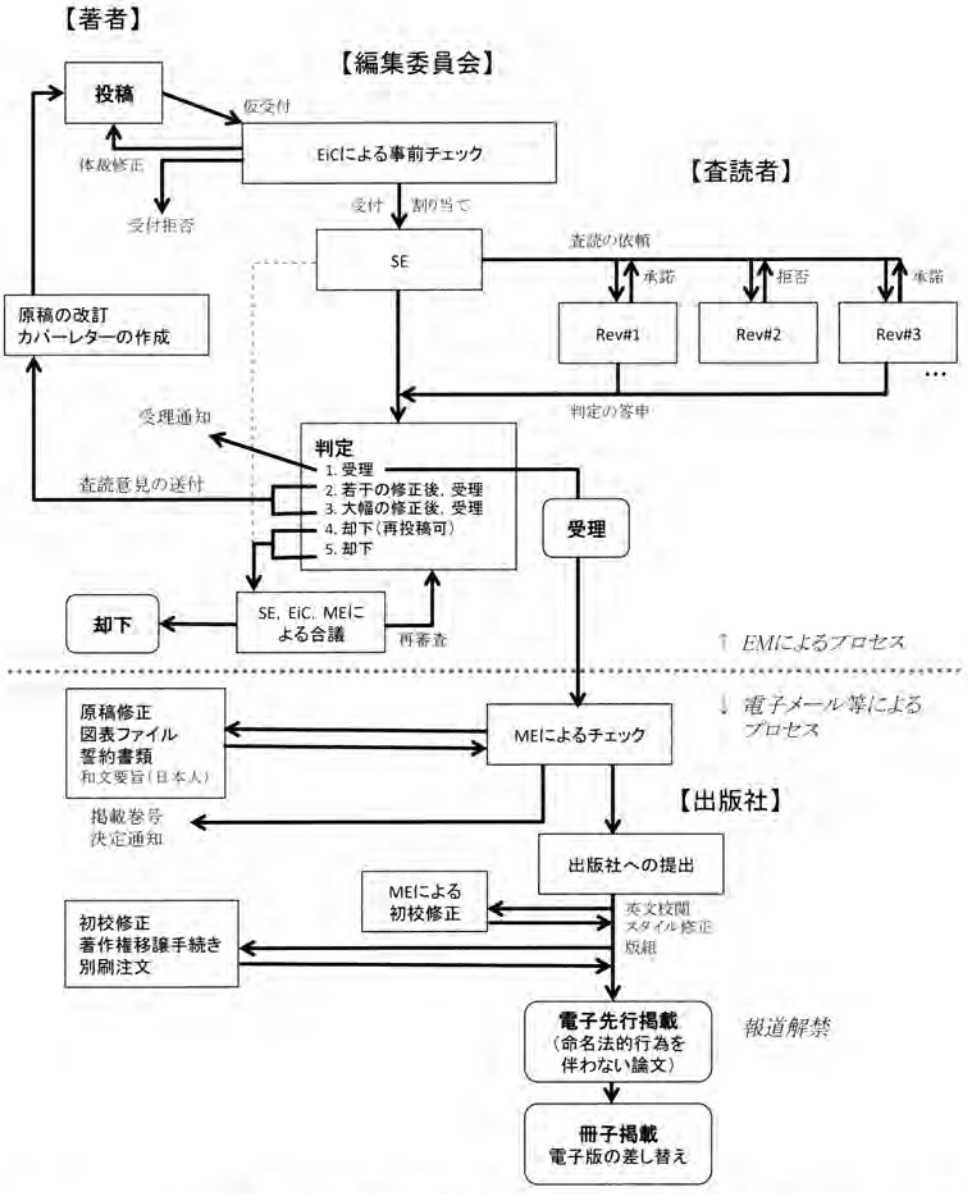

図1. *Ichthyological Research*における投稿原稿の流れ．EM, Editorial Manager™（シュプリンガー社の電子投稿管理システム）；EiC，編集委員長；ME，主任編集委員；SE，担当編集委員；Rev，査読者．投稿者の登録および投稿はhttp://www.editorialmanager.com/icre/default.aspから行うことができる．

の対策の一つです．

以上の書類が揃った段階で，主任編集委員から，受理日（EMからの通知日）や掲載号，超過ページ代に関する情報を含む書面を著者に送っています（なお，EMのサーバーがヨーロッパにあるため，受理日に時差が含まれることをご了解ください）．そして，確定稿は主任編集委員からシュプリンガー社に提出されます．その後，社内の専門編集者により，英文校閲，版組等が行われ，普通1ヶ月以内に著者と主任編集委員に初稿（PDF）が送られます（正確には初稿が掲載されたウェブURLが電子メールで通知されます）．この段階で著作権移譲手続きや別刷注文も行われます．基本的に論文の著作権は日本魚類学会に移譲されます．版組された論文（冊子，PDF）の販売権はシュプリンガー社が所有します．後者の権利を限定的に買い取ることも可能です（Springer Open Choice™），詳しくはIRのウェブページ（http://www.springer.com/10228）をご覧ください．

その後，冊子掲載に先立ち，通常受理後1ヶ月あまりで，シュプリンガー社のIRのウェブ上で電子先行掲載（Online First™）が行われます．新種記載などの命名法的行為を伴う論文については，現行の国際動物命名規約との整合性から，ウェブ上での掲載は冊子掲載の直後となります（Shinohara and Czeschlik, 2008）．

3. 投稿者として

次に価値ある研究成果をIRにスムーズに掲載するためのいくつかの技術的な推奨事項について記します．

英文校閲　投稿前，または審査プロセスで大きな改訂があった場合には，英語を母国語とし，専門分野に一定の知識がある人による英文校閲を受けることを強く推奨します．専門英文校閲業者を利用することが一般的ですが，研究分野の近い英語圏の同業者に内容的な議論もかねて英文をチェックしてもらうことができれば，なお有意義でしょう．学会誌は教育機関ではありませんので，査読者や編集委員に英語を直してもらう，という姿勢はお互いのためにならず，受理の可能性を低下させます．また文法的に正しい英語でも，自然な英語ではない場合があります．英文校閲業者に依頼する場合，少なからぬ出費を伴います．また有料の英文校閲を受けていても「英語がまずい」という指摘を受け，不快な思いをすることは日本人としてしばしば経験することです．これらは英語を母国語としない者の国際誌におけるハンデキャップとして現状では容認せざるを得ません．受理後，シュプリンガー社の専門編集者による英文校閲が行われますが，これは最終的なスペルや文法のチェックに過ぎませんので，英文については著者の責任のもとで準備する必要があります．

投稿規定の順守と体裁への気配り　投稿に際しては，まずIRのウェブページにある投稿規定をよく読んでください．原稿の構成やレイアウト，文献引用スタイル，そのほかの注意事項が詳しく記されています．その上で，最近の記事の体裁に十分に合わせて原稿を作成いただくことが，誰にとってもプラスになります．あまりに体裁がかけ離れている場合，編集委員長が差し戻しますので，双方の時間のロスとなります．また体裁上の不統一や乱れが多い場合，査読者の集中力を欠く結果となり，ネガティブな印象を与えかねません．「体裁の整っていない原稿は，内容にも不備がある可能性が高い」という信念をもつ研究者もいます．最終的には主任編集委員が出版社に送る前に，「カンマやスペースのあるなしのチェック」，「文献スタイルの修正」，「ミススペルやケアレスミスの修正」といった作業に膨大な時間を割くことになります．著者が十分な注意を払うだけで，著者自身，また原稿にかかわるすべての同業者の時間が大きく節約されます．

査読意見への対応　次に著者として重要なのが，査読コメントに対する対応と，その内容を記した返答（カバーレター）です．現在IRを含めた多くの国際誌で，このカバーレターは判定上重要な意味をもちます．なぜなら，再判定の際に，担当編集委員も査読者も，著者が査読意見に対してどのように対応したか（あるいはしなかった場合，なぜしなかったか）を，新旧の原稿をつぶさに比較し，推察することは，あまりに効率が悪く，困難だからです．特に単純なミスの修正ではない，書き換え，再解析，原稿の再構成等については，コメントへの対応を別紙に具体的に記してください．その合理性や妥当性が重要な判定基準となります．基本的に英文でレターを作成する必要があり，多くの日本人にとって骨の折れる作業ですが，重要なプロセスです．

原稿改訂やカバーレターの作成時には，同業者としての査読者の意見に十分に耳を傾け，まずはその意図を理解する姿勢が肝要です．もちろん，著者こそが一般にその課題に最も詳しいのであり，査読意見が不適当であったり，取り入れることが逆効果であったり，単なる知識不足や勘違いに基づくような場合もありえます．そのような場合でも丁寧に著者の意見を明確に記せば，担当編集委員が是非を判断することができます．「レフェリーへの反論」というようなタイトルを付けたり，いかに自分が正しく，査読意見が不適当なものであるかを激しい語調で書き連ねることは避けるべきでしょう．誤解の原因が，もとを正せば原稿中の表現のあいまいさに起因する場合も多くあります．自分の原稿に差し挟まれた（ときとして理不尽な）意見に対し，頭に血が上ることはありえますが，ボランティアに基づくピアレビュー制の仕組みを理解すれば，自ずと冷静で真摯な，かつ同業者同士としての毅然とした対応を取ることになろうかと思います．ピアレビュープロセスでは，著者のミスや見落としのチェックにとどまらず，ときに本質的に論文の科学的価値を高める結果をもたらすケースも確かに存在します．

承服できない理由で却下の判定が下された場合には，冷静ではいられないかもしれません．上述のように，却

下の判断の責任は査読者や担当編集委員ではなく，編集委員会にあります．価値判断の相違ではなく，明らかに内容的な誤りに基づく判定である場合，編集委員長宛に（冷静に）ご一報ください．判定はくつがえりませんが，再投稿へのより具体的な方針が示されることもありえます．

忌避事項　学術論文の最も重要な要件の一つはオリジナリティです．いうまでもありませんが，同等な（もしくは大きく重なる）内容や同じデータに基づく複数の論文を学術誌に掲載することはできません（もちろん，出典を明記した引用・再利用は可能です）．同じ期間にそのような原稿を複数の学術誌に投稿することも，二重投稿として固く禁じられています．別雑誌への投稿は，却下もしくは取り下げの手続きのあとに行わなければなりません．捏造・盗用に関してはここで言及する必要もありませんが，それが疑われうることもできるだけ避けるのが賢明です．

もう一点注意願いたいのが，電子または冊子上での公表以前に新聞・テレビ・インターネット等で実質的な内容を公表することが一般に禁じられていることです．最近では学術研究の一般社会への還元等，研究者のアウトリーチ活動が推奨されていることにも関係して，多くの科学研究成果が新聞等で報道されています．IRで公表された成果についても，ぜひ広く，効果的に社会に伝えてほしいと考えています．しかし，そのタイミングは，受理時ではなく，公表後であることを十分に認識する必要があります．このような「メディア解禁規則」は，まず，学術誌のオリジナリティと（少なくとも新聞等と同等な）権威を守るために必要です．さらに本質的に重要なのが，学術的な根拠を伴わずに（つまり真偽が客観的に判断できない形で），ときとして不正確な情報が社会に流れ，それが大きな社会的影響をもたらすことがありうることです．新聞報道等はときとして一般へのわかりやすさのために厳密性や正確さを代償にするので，重要な内容が抜け落ちる場合があります．学術誌への掲載を内容の信頼性を保証する「権威」と考えるならば，客観的に検証できる状況を整えてから社会に成果を還元することが研究者には求められます．また忘れがちな点ですが，論文（図表を含む）の著作権や販売権が学会や出版社に移譲されることにも留意する必要があります．

「メディア解禁規則」については，著名な国際誌のものが参考になります（例えば，Nature：http://www.nature.com/nature/authors/policy/embargo.html；Science：http://www.eurekalert.org/pio/sci/index.php?page=embargo；アメリカ生態学会：http://esapubs.org/esapubs/embargo.htm）．またIRでも投稿規定にそれを明記する方向で進めています．

4. 査読者として（また編集委員として）

査読者（または編集委員）は，論文原稿の価値を自らの専門的知識に照らして公正に判断し，編集委員会にその原稿の処遇を答申する立場であり，ピアレビュー制における要となります．

査読者（または編集委員）の任を引き受けた場合，最も大事なことは「自分がしてほしいように，他人にふるまう」という互恵の精神です（McPeek et al., 2009）．自らの本務に追われる中で，学会誌のピアレビュー（や編集）を引き受けるのは，すでに述べたとおり，それがお互い様であることと，専門分野への貢献に対する誇りと責任が基盤にあるからです．そこで，査読者や編集委員には大きく2つのことが求められると思います．まず，(1) 期限を守ること，そして (2) 同業者として対等な立場で公正に判断することです．

(1) の期限を守ることは，社会的には常識の部類であるものの，本務・雑務に追われ，自らの仕事もこなし難い毎日を送る昨今の研究者にとっては決して容易ではありません．しかし，投稿から判定までの時間を決める最大の決定要因は，一般に査読期間だといわれます（McPeek et al., 2009）．一方，最近では，判定結果がいつ出るかが，学位取得（もしくは留年）や研究費の獲得・評価など，個人や組織の利害に直結する場合もあります．特別な配慮は必要ありませんが，特別な遅延は避けるべきです．状況に応じて査読者を辞退する判断も必要となります．

(2) 査読者は自らの科学者としての知識と誠実さのみに照らして論文内容を公正に評価すべきなのは言うまでもなく，査読者の匿名性がそれを保証しています．本誌は通常のシングル・ブラインド制（査読者には著者の名前がわかる方式）です．したがって，査読者が著者やそのグループ，国籍等に対する偏見的・優遇的な態度を示さないことを前提としています．もし明らかに偏った意見とみなされた場合には，担当編集委員，あるいは編集委員会が判定の際にできるだけその点を考慮するようにしています．

対等で公正，という点からしばしば気になるのが，コメントにおける無用に激しい口調，辛辣な表現，指導者のような表現，論文内容を超える批判などです．「貴重な時間を完成度の低い（手抜きな，不勉強な…）論文に浪費した」という憤懣からの場合が多いと思われますが，主要な問題点を明確に述べ，妥当な判定を答申するだけで，十分な効果があるように思います．もっとも日本人の場合，英語の語彙の少なさにより，ぶっきらぼうな表現をとりがちであることも事実です．まずその論文のポジティブな側面（科学に貢献する面）を認め，言及するのが，公正さへの第一歩かもしれません．いずれにせよ，査読意見はピアレビュー制，そして雑誌や専門分野自体のレベルを押し上げるための要であり，真摯な互恵精神のもとでこそ，ピアレビュー制はその力を最大限発揮できることを心に留めておきたいものです．

5. IRの抱える大きな課題

最後に，現在IRが抱える大きな課題について報告し，今後，とくに会員の皆さんとの情報共有と協力のもとで発展的に解決していきたいと考えています．

大きな課題とは，IRの継続的な発刊自体に直接関わる問題です．IRでは，この3年足らずの間に掲載可能な論文数が減少しており，発刊の危機に近づきつつあります．この傾向が一時的であることを願うものですが，この要因を考察すると，そうでない可能性も十分にあります．

IRの掲載待ち論文数が減少している原因には主に3点が考えられ，それらが同時にはたらいているためと考えています．

まず，2009年から順次発行日を各号約1ヶ月前倒ししたことです（現在，1月下旬，4月下旬，7月下旬，11月上旬に発行）．そのため，1ヶ月間に受理される分（平均して4．5本）だけ，実質目減りしたことになります．

しかし，より深刻と考えられるのは受理原稿の絶対数の減少です．IRでは年間50–60本の論文を掲載しますので，年間受理数がそれを下回ると発刊が難しくなります．受理数は受付数×受理率となりますが，2007年からの最近4年間で，受付数は84（受付時の却下を含む），115（同），76（受付分のみ），102本（同）と，実質，増加傾向にあるのに対して，受理率は，すでに判定が出たものについて，63%（受付時の却下を含む），37%（同），55%（受付分のみ），46%（同）とかなり低い状況であり，掲載数に達していません．特に2007年から可能となった会員以外からの投稿論文において，受理率が低い傾向にあります（最近4年間で，会員74±7%，非会員25±14%；平均±標準偏差）．そのような会員外の投稿数は2007年の35%から，2008年に53%，2009年に45%，2010年に54%にまで増えています．もともと会員外に門戸を開いた目的は良質で多様な論文を招き入れるためでしたが，上記のデータは，少なくとも現在はまだそのように機能していないことを示しています．

第3点は，上記の反面として，平均して受理される割合の高い会員からの投稿数が，わずかながらも減少傾向にあることです．この理由については，上の問題とともに後ほど考察します．

掲載待ち論文数の減少は，一方で，受理から冊子掲載までの待ち時間が短縮する結果となり，著者にとってはよい面もあります．しかし，現在，命名法的行為に関わる論文以外については，先に述べた電子先行掲載が受理日より平均55±18日後と，かなり迅速に行われます（IR57：2010年分）．これは正式な出版なので，冊子への掲載までの時間は現実的に問題とはなりません．また新種記載論文等については，できる限り早く冊子掲載できるよう工夫をしており，受理より平均135±27日（2010年）で掲載されています（これは，ある程度掲載待ち論文数が増えても維持されます）．余裕をもって，また安定して編集・出版を続ける上で，やはり現状は望ましくない危険な状況です．

では，上の第2点と第3点は，どのような理由で生じているのでしょうか．

わたしたちは，これはIRの国際的な魅力と評価が十分ではないためと考えています．カラー印刷代，超過ページ代，受理・掲載までの日数等において，IRは他の関連誌と比較してとくに有利な面がありません．近年雑誌の比較に用いられることが多いトムソン・ロイター社の2年間インパクトファクター（被引用率指標）は2009年度で0.635と微増傾向にあるものの，動物学分野で127誌中96位と，決して誇れる値ではありません．昨今，自らの研究成果の発表の場として，できるだけアピール性の高い（例えば，インパクトファクターの高い）雑誌を選ぶ国際的な傾向を考えると，会員外の著者がIRを投稿先に選ぶ際に，インパクトファクターの値が参考にされていることは十分に考えられます．同時にそれは会員においても当てはまると考えられます．共通指標による雑誌の序列化が国内的な空洞化現象，つまり，自信のある論文ほど，たとえわずかでも指標値の高い欧米の雑誌を選び，その結果，国内誌の優先順位が低くなるという傾向は，欧米誌が研究者数や歴史的要因で被引用率において有利である点を考えると不思議ではありません．一方で，流行にとらわれることなく，魚類の基礎研究の多様な成果を掲載するIRの伝統は，国内外の魚類学者から一定の評価を受けているのも事実です．これは，会員の皆さんが，以前同様，良質な論文をIRに投稿いただいているおかげです．

以上から，良質な投稿論文を集め，安定的にIRを出版するのに十分な受理論文を確保するためには，やはりIRの魅力と評価を増進することが本道です．とくに分類学分野からの要望が多いカラー印刷代や超過ページ代の軽減等，投稿者へのサービス面は，ご周知の通り，昨今の学会の経済状態の悪化から，なかなか実現が困難な状況です．現在は，電子版でのカラー写真の利用や電子補足資料（Electronic supplementary material: ESM）の活用をお願いしているところです．しかし，是非ともそれらを改善できるよう，幹事会とともに鋭意努力していきます．その一方で，良質な論文を集めるために，わたしたちは，目に見える雑誌評価の向上を目指すことも重要であり，またそれは著者にとっても，編集委員会や学会にとっても，意義があると確信しています．つまり，具体的にはインパクトファクターの上昇です．

それは，インパクトファクターのような短期的な学術誌の評価にすぎない一指標に一喜一憂するということでは決してありません．こういった標準指標の上昇により，会員・非会員の著者が自信作を本誌に投稿する意欲が上昇し，その結果，まず，掲載可能な論文の絶対数が増加することを目的としています．興味深く，重要な論文が引用されやすいとすると，そのような論文の掲載はさらに雑誌全体の被引用率を上昇させ，正のフィード

バックが動き出すかもしれません．また多大な労力を本誌の編集に傾注している編集委員のやりがいにもつながるかもしれません．

2年間（もしくは5年間）インパクトファクターという指標値は，ある雑誌に過去2年（5年）間に掲載された論文の，ある年の平均被引用回数を，引用文献データベース（Web of Science）に基づき算出した値です．2009年の2年間インパクトファクター（0.635）は，2007年と2008年にIRで出版された総論文数（96）が，国際誌において2009年に1本当たり平均して0.635回（計61回）引用されたことを意味します．つまり，過去2年間のIRの掲載論文を引用すればするほど，インパクトファクターは上がります．当然不要な文献の引用は控えるべきですが，必然性がある場合には是非忘れずに過去2年間のIR掲載論文の引用をお願いする次第です．そしてもちろん，今後とも優れた論文をIRに投稿してください．まず，上記値の2倍を目指したいものです．

最後に，繰り返しとなりますが，IRは会員を中心とした魚類研究を真摯に続ける同業者の主体的な参加（投稿，査読，編集）により成り立つ学術媒体です．わたしたちの学会が発行するIRを，日本から発信する重要な魚類学の国際誌として，ますます価値ある誇らしい存在へと発展させるよう，先達の献身的な努力に思いをはせつつ，編集委員会として，幹事会，評議会とともに今後も一層の努力を払っていきたいと考えています．あわせて今後とも会員皆さんの，投稿者として，また査読者，編集委員としての積極的な参画を心より願うものです．

引用文献

McPeek, M. A., D. L. DeAngelis, R. G. Shaw, A. J. Moore, M. D. Rausher, D. R. Strong, A. M. Ellison, L. Barrett, L. Rieseberg, M. D. Breed, J. Sullivan, C. W. Osenberg, M. Holyoak and M. A. Elgar. 2009. The golden rule of reviewing. Am. Nat., 173: E155–E158.

Shinohara, G. and D. Czeschlik. 2008. Online first publication. Ichthyol. Res., 55: 1.

（渡辺勝敏 Katsutoshi Watanabe：Ichthyological Research 主任編集委員：〒606–8502 京都府京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院理学研究科 e-mail: watanak@terra.zool.kyoto-u.ac.jp：佐々木邦夫 Kunio Sasaki：日本魚類学会編集委員長：〒780–8520 高知県高知市曙町2–5–1 高知大学理学部海洋生物学研究室 e-mail: fishssk@cc.kochi-u.ac.jp）